

児玉谷 史朗 編

『アフリカにおける
商業的農業の発展』研究双書428 アジア経済研究所 1993年
xii+248ページ

島田 周平

I はじめに

1970年代以降サハラ以南アフリカ諸国では、農業危機が叫ばれることが多くなってきた。1人当り食糧生産量の減少に象徴される食糧危機と、貴重な外貨稼得源である商品作物生産の停滞といった事態が同時に発生してきたからである。本書は商業的農業の停滞こそアフリカの農業危機の重要な要素であると考え、アフリカ農業の商業化の特質やそれを取り巻く諸条件の解明を通してその危機の内容をより多面的に理解しようとするものである。なお、ここで著者らがいう商業的農業とは、「自給のためではなく、他人に販売するための農業生産」(i ページ)を意味し、生産物の商品化に注目した定義である。

本書は以下のような章立てで構成されている。括弧内は執筆者である。

- 第1章 アフリカにおける商業的農業の発展と経済発展, 国家 (児玉谷史朗)
- 第2章 ザイール川河口地域のキャッサバ生産に関する一考察 (武内進一)
- 第3章 ザンビアにおける商業的農業の発展 (児玉谷史朗)
- 第4章 ガーナにおける伝統農法とココア農業の盛衰 (細見真也)
- 第5章 ケニアにおける商業的農業の発達とその特徴 (半澤和夫)
- 第6章 キンシャサ市向け食糧の生産・流通構造 (武内進一)

II 各章の内容

第1章では、1980年代以降特に重要視されることになってきた、商業的農業の停滞と国家政策との関係に関する議論が紹介されている。アフリカにおける商業的農業は、植民地時代の原料供給源、独立後の外貨稼得源、食糧供給源といった観点から議論されることが多かった。しかし1970年代のアフリカの農業危機以来、それは小農と経済政策・制度、さらには国家との関連で議論されることが多くなってきた。

世銀のバグ報告書の商業的農業衰退論の中の政府原因論(生産者価格政策、為替・関税政策、農業流通政策批判)はその始まりであった。その後、農業不振の原因を農業政策の政治的利用に求めたベイツ(R. H. Bates)、プレッチャー(J. R. Pletcher)の説や、ハイデン(G. Hyden)の小農「退場」論、アザリヤ(V. Azarya)の「関与・脱関与」論などが展開されてきたという。

第2章では、ザイール川河口地域におけるキャッサバ生産拡大過程を、キャッサバの持つ諸特性、同地域における交易、植民地政府の政策、急速な都市化等の観点から考察している。

キャッサバは植民地以前期(15~19世紀後半)に、その安定した収量と高い生産性によって住民の基礎食糧としての地位を確立し、植民地期(1885~1960年)には、河口地域の重要な主食作物となっていた。第2次大戦後、工業化の進展と急激な都市化が、商品作物としてのキャッサバ生産を拡大させ、独立(1960年)以後、都市化の進展によりキャッサバ需要はさらに増大し続けた。最近の経済危機は、食糧輸入を減少させており、キャッサバ依存度はさらに高まる可能性がある」と著者は示唆している。

第3章では、ザンビアのアフリカ人農民による市場向け農産物生産の拡大要因を、政府の諸政策の変化と地域的差異に注目して分析している。

植民地期、白人農場優遇策がとられ、少数の白人大規模商業的経営と自給的アフリカ人農業とからなる二重構造が成立した。アフリカ人農民の商業化は南部州から進展したが、それは、農民の自主的・積極的な技術修得、資本蓄積によるものであり、政府の役割は補

助的なものであった。出稼ぎ労働に対するトウモロコシ栽培の優位性も重要な要因であったという。

1964年の独立後、銅産業の好況、急激な都市化、新農業開発政策の開始、マーケティング・ボードの拡充、全国統一価格政策など、小農を取り巻く環境は大きく変化し、商業化は各地で進展をみた。しかし、1975年の銅価格の低落は、政府に農業部門の見直しを迫り、商品作物の多様化、農業流通制度の改編が行なわれた。

この章の後半で著者は、商業化が遅かった（1970年以降進展）北部州での商業化の過程を農耕システムの点から検討している。イバラ (ibala) と呼ばれる屋敷地周辺の常畑とチテメネ (citemene) と呼ばれる焼畑耕作を組み合わせた農業が支配的であったこの地域では、商業化は、イバラでの化学肥料を使った高収量品種トウモロコシの栽培という形で進展したという。

第4章では、ガーナの重要な輸出換金作物であるココアの栽培拡大の要因を、農民の相互補完性の論理に基づく伝統的人間観や価値観に求めることが述べられている。農業にみられる混作栽培や性別分業は、農民が人間や農作物に内在する相互補完的な役割を最大限引きだそうとする価値観に基づくものであり、ココアが農民に受容されたのは、このような価値観にココア栽培が合致したためであり、租税制度の導入や「実質生産者価格」は主たる理由ではないという。

同様のことは1970年代後半以降のココア農業衰退の局面においてもいえ、ココア農業の衰退は、学校教育がもたらした価値観の変化による青少年の農業・農村離れに求めるべきで、実質生産者価格の低下や労働力不足から説くのは誤りだと批判する。

第5章では、ケニアにおけるアフリカ人小農の商業的農業の発展過程を、トウモロコシの商品化と小農の雇用労働力の利用を中心に分析している。

ケニアではアフリカ人の商業的農業の成立は植民地支配以降であり、それはキクユ (Kikuyu) 地域から発展した。1920年代末以降、限定的なアフリカ人農業振興策がとられ、一部で商品作物生産が拡大した。

植民地後期には、「マウマウ」対策という政治的理由からアフリカ人の私的土地所有制度の確立、商品作物栽培の奨励を謳った「スウィナー-ton計画」

(Swynnerton Plan) が実施され、セントラル州の農業生産額は急速に拡大した。独立後の農政もこの計画の延長線上にあったが、白人大規模商業的経営とアフリカ人小農とからなる二重構造は存続した。

アフリカ人小農の商業的農業の発展は、栽培技術の改良と雇用労働力依存増大をもたらした伝統的共同労働組織の衰退をみた。しかし労働力余剰下での雇用労働増大やトウモロコシの販売（収穫期）と買い戻し（端境期）にみられる「非経済的行為」は、「慣習経済」のもとでの所得分配や相互扶助的社会的慣習のもとでの合理的判断として理解すべきだという。

第6章は1987年から開始されたザイルの首都キンシャサへの食糧供給構造に関する調査報告の紹介である。キンシャサは急成長を遂げた大都市である。1920年代わずかに人口12万～3万人であったものが、50年に約20万人、60年に40万人、そして現在300万人程度となった。著者は報告書の中から、食糧生産、販売・購入、集荷・輸送、小売市場に関する部分を中心に紹介している。

キンシャサ近郊2州では、キャッサバ、トウモロコシ、落花生がほとんどの農家で栽培され、70%以上の農家がそれを販売にまわしており、それらは「道路輸送業者」、「河川輸送業者」、「バルコリ」(par colis) によってキンシャサへ輸送されている。これら3つの輸送業者はいずれも小規模で、かつ利潤が少なく、キンシャサの食糧市場がきわめて競争的であることが示唆されている。最近、経済危機による購入規模の縮小化、売り手の増加、小売需要の減少などの現象がみられるという。

III 若干の問題点と残された課題

本書は各章ごとに分析対象と重点の置き方が異なっており、問題点の指摘は各章ごとに細かく行なうべきかも知れない。しかし、分析対象と重点の置き方の違いにもかかわらず、各章の分析視点とその結果にはかなり共通点がみられ、しかもその点にこそ本書が提起しようとしている問題の核心があると考えられるので、ここでは各章の考察は割愛し、全体を通じた問題点の指摘を行ないたい。

本書にみられる共通の視点とは、小農の商業化を政策的枠組を視野に入れつつ、しかし小農の側からみるという視点である。小農はさまざまな経済的・社会的条件下に置かれている。彼らはそれらの諸条件に対し、自分たちが持つ価値観や慣習をもって対応を試みる。商業化の展開が各地で多様な様相を示すのはそのためである。キャッサバの普及要因は労働節約性に求められるべきではなく収量の安定性と高い生産性に求められること、ココアの受容は農民が持つ相互補完性の価値観にココア栽培が合致したためであること、収穫期の販売と端境期の買い戻しにみられる一見非経済的行動は「フリー・ライダー」社会では合理的であること、家族内に余剰労働力が存在する中で農業労働者を雇用することは「慣習経済」下での富の再分配効果があること、等の指摘は、そのような視点からみつけだされた小農の価値観や慣習の一例である。

また小農の商業化において共通にみられた結果とは、小農の商業化が植民地時代、独立後を通して、政府の政策的支援とは無縁に、農民の自発性によって進展してきたという分析結果である。この結論はしかしながら、アフリカ人小農の商業化の要因が、価値観や慣習の多様化、それに規定された小農の選択行動の多様性を反映して複雑多岐にわたることをわれわれに改めて認識させることになった。先述した諸要因、たとえば相互補完性（第4章）、経済効率性（第3章）、作物の収量安定性（第2章）、相互扶助的社会慣習（第5章）、なども相互に矛盾した価値観ないし行動様式に基づいている。このような諸要因を地域的特性として相互の関連を考慮することなく受け入れるべきものなのか、あるいはより高次の価値観、行動様式の局地的表出とみるべきか、本書は新たな問題を投げかけたことなる。

以上の点で気になるのは、本書にみられる小農の価値観、行動様式の捉え方である。性別分業にみられる相互補完性は、性別の「補完性」に意味があるのか

「分業指向」に意味があるのか再検討する必要がある。同様に、出稼ぎ労働とトウモロコシ生産との現金収入比較あるいは生産者価格と生産量との相関で測られる経済効率性も、危険分散化指向（収量安定性指向）といった面から慎重に検討してみる必要がある。

商業化の進展を商業的農業論から切り放し、非自給的部分の増大と捉えることによって、本書は、アフリカの小農が現在直面している問題をより実態に近いところで理解することに成功したといえるが、アフリカ人小農の商業化＝商業的農業の発展と考えるべきかどうかという問題、さらには粗放化指向（キャッサバ栽培）と商業化（その販売）との共存、自給的性格の維持と商業化の進展、共同労働（相互扶助）の衰退と労働力余剰下の雇用労働の増加といった、相互に異質な、あるいは一見矛盾する事態が同時並行的に同一地域においてさえ生起・進展している問題を、どのように理解すべきかという困難な問題をも提起することになった。

本書を、各国における農業政策と小農の商業化との関連を理解するために役立つ研究書と捉えればきわめて有用な参考書ということが出来る（特に第2, 3, 5章）。しかし本書は、アフリカ人小農の商業化の要因を、国家的（あるいは国際的）枠組の中における小農の行動様式や価値観にまで遡って考察しようとしている意欲的な面を持っているがゆえに、その点に興味を惹かれる読者は、その問題意識に吸引され、解かれた問題以上に多くのしかも重要な課題を与えられたとの印象を拭いえないであろう。しかし、構造調整政策のもとで呻吟する小農の農業生産が今後どのようなのかを考える上で、本書はきわめて刺激的な課題を提起しているといえ、今後の小農研究がこれらの課題を出発点として展開される必要があるという点では、時宜を得た書といえる。

（東北大学理学部教授）